

梶ピエールのカリフォルニア日記。 

プロフィール

kaikaji

関西の私立大学で中国経済論を教えています。タイトルですが、「カリフォルニアでつけている日記」という以外に深い意味はありません。

日記の検索

詳細 一覧

カレンダー

<<	2006/07						>>
日	月	火	水	木	金	土	
						1	
2	3	4	5	6	7	8	
9	10	11	12	13	14	15	
16	17	18	19	20	21	22	
23	24	25	26	27	28	29	
30	31						

最新タイトル

[\[中国\]\[経済\]\[読書\]コルナイと中国経済](#)

[\[グローバリズム\]マンキュー先生を笑わせた記事](#)

[\[中国\]\[経済\]昨日の話題の補足](#)

[\[中国\]\[民族\]せんろはつづくよチベットまでも](#)

[\[中国\]\[経済\]米著名ブロガーの人民元談義](#)

補足記事

[\[経済\]フィッシャー・ブラック V.S スティグリッツ=グリーンワールド](#)

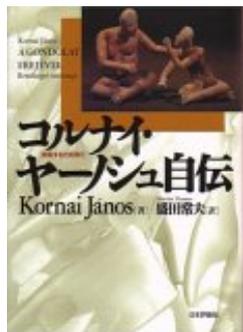
最近のコメント

<前の日

2006-07-26

[\[中国\]\[経済\]\[読書\]コルナイと中国経済](#) 

「嫁」といわれて素直に読んだ。



コルナイ・ヤーノシュ自伝 思索する力を得て

作者: コルナイヤーノシュ, Kornai János, 盛田常夫

出版社/メーカー: 日本評論社

発売日: 2006/06

メディア: 単行本

記者の盛田氏があとがきで嘆いておられるように、コルナイはその重要な主著の多くが完全な形では日本語に翻訳されておらず、また過去に翻訳されたものも多くが絶版になっている。しかし、少なくとも旧ソ連・東欧の経済問題の専門家だけでなく、中国も含めた広い意味での移行経済を専攻しているものにとって、コルナイは経済理論家としてある意味でサミュエルソンやフリードマンなどよりも重要な存在であった。特に中国の場合、なによりも現在活躍中の経済学者の多くがコルナイの議論から、大きな影響を受けてきたという事情があるからだ。

たとえば、代表的な中国書の古本サイトでコルナイの中国表記である「科爾内」を検索してみよう。

<http://www.kongfz.com:8080/book.jsp?query=%BF%C6%B6%FB%C4%DA&page=0>

大部の主著である『反均衡』『不足の経済学』を始めとして、ここに出ていないものも含めれば軽く10点を越す著書が出版されている。特に80年代はコルナイの翻訳出版ラッシュと言う状況といていい。また、中国の国有企業の改革などを論じた理論・実証的な論文には必ずといっていいほどコルナイの議論が引用されてきた。共産党指導の下での市場経済の導入という実験を始めた当時の中国の経済学徒の間で、コルナイの著作はまさにむさぼるように - 日本の学界とは比べ物にならない切実さをもって 読まれたということがうかがえる。

しかし、ここで上記の検索結果をもう一度よく見直すと、一つのことに気付く。そう、90年代に出版されたものが全くないのだ。ネットで調べた限り、主著の一つである'Socialist System'など90年代の著作がこれまで中国で翻訳された形跡はない。もちろんちょっとネットで検索をかけたただけなので漏れもあるだろうが、90年代、すなわちベルリンの壁が崩壊し天安門事件が起き、江沢民が政権の座につくと同時に同時に、コルナイの著作は中国国内では80年代の出版ラッシュが嘘のように出版されなくなってしまった、といっても過言ではないだろう。

誤解のないようにいっていくと、既に述べたように90年代にも中国語の学術論文などにはコルナイの著作は盛んに引用されていたから、この時期に彼の理論が中国のアカデミズムの中でもタブー視されたということは考えられない。しかし、こと出版に関して

2006-07-20

糞馬

2006-07-26

kaikaji

2006-07-20

kaikaji

2006-07-20

山形

2006-07-26

りえたん

最近のトラックバック

2006-07-23

[economy]孤軍奮闘する中国人民銀行

2006-06-26

[経済] 忘れられたリフレ派、没後20年

2006-07-08

id:shinichiroinaba

2006-07-09

id:shinichiroinaba

2006-07-08

id:lovelovedog

カウンター

196712

は何らかの政治的意図から実現が難しくなった、と考えざるを得ない。あるいは、天安門事件の挫折と92年の南巡講話以来、既存の政治体制を温存したままで外資主導による経済成長路線が軌道に乗る中で、経済の効率的な運営を目指すうえでの社会主義の体制変革の不可避性を強調するコルナイの著作がかつてほどの切実さをもって読まれなくなった、と言う事情もあるのかもしれない。僕自身90年代後半から本格的に中国研究を始めたので、こういったコルナイに対する意識の「変化」についてはよくわからない。

しかし、21世紀に入ると状況はまた少し変化する。中国を代表する改革派のエコノミストである呉敬璉が編集主幹を勤め青木昌彦も編集委員になっている『比較』などの学術誌でコルナイ自身の論考が紹介されたり、コルナイの所説をめぐって盛んに議論が展開されるようになる。また2003年には2001年の著作'Welfare, Choice and Solidarity in Transition'(Karen Egglestonとの共著)の翻訳も出版されている。

このようないわば「コルナイ・ルネッサンス」の背景として、80年代に学生としてコルナイをむさぼるように呼んだ人々が大学やシンクタンクでそれなりの地位を得ようになり、私営企業家の入党や国有企業の財産権改革が改めて大きな政治経済的な課題となる中で、反対派から「新自由主義者」として批判されながらも、コルナイを理論的支柱の一つにしながらかの改革の一層の推進を主張している—このような見取り図を描いてもそれほど的外れではないのではないだろうか。

そういう意味で、改革開放以降の中国経済のうねりを語る上でもコルナイの一連の著作は避けて通れない古典だといっていい。また、コルナイが経験した東欧と中国の政治・経済的な状況の違いを考える上でも本書の記述は実に興味深い。値段が値段なので飛ぶようには売れることはないだろうが、本書が広く話題を呼ぶことで、彼の過去の著作の出版・再版に向けての動きにも弾みがつくことを願わずにはいられない。

補足: このようなコルナイの理論が中国人経済学者に与えたインパクトを考える上でちょっと気になるのは文中に出てくる中国人名で通常表記とは明らかに異なるものが散見されることだ。例えば272ページにコルナイの「ソフトな予算制約」理論に数学的な厳密な形式化を行った若き中国人としてインギ・シアンという「女性」が登場するが、これはどう考えてもUC Berkeleyのチエン・インイー(銭穎一)教授であろう(もちろん男性)。このほか、336ページに出てくる「チェン gangs・シュー」は許成鋼(シュー・チャンガン)氏だと思う。全体としてわかりやすい丁寧な訳業だけに、惜しまれる。

[コメントを書く]

econ-econome 『嫁!との記述を見て最近焦って購入したのですが、不勉強ながらコルナイ氏の著作に触れたことが無かったので新鮮な気持ちで読んでいます。先生のエントリ、勉強になります。』

kaikaji 『コメントありがとうございます。上のエントリはコルナイの理論の中身に踏み込んだわけではないのであまり参考にならなかったかもしれません。』

本書を読んでみて改めて感じるのはコルナイの議論はあくまでも工業経済を基盤に組み立てられたものと言うことです。その意味で、80年代の中国は学術的にはコルナイの影響を大きく受けながらも現実には必ずしもその理論どおり歩まなかった - 所有権改革がずっと後回しにされたまま高い成長を遂げることができた - と言えるかもしれません。

それはとりもなおさず、とりあえず農業生産を刺激することによって連鎖反動的に成長が生じるという「経済発展」のメカニズムを「移行経済」の課題に優先させることができたためだ、といえるでしょうか。これは以前サクスなどが提起した論点なのですが、またいつか機会があればまとめてみたいと思います。』

りえたん 『中国語非学習者がBeijingをベイジングと読むのは仕方ないとしても、中国人の名前も訳して金を貰おうとするなら、gangsは「 gangs」と発音しないことくらいは調べておけ、と矢吹先生が言っていましたw

いや、原書ではトマスウェード方式で書かれているのかピンインなのかわかりませんが、1人を2人に増やすのは後々混乱するだけなのでこれくらいの確認はして欲しいも

んです。「オレの名前はあんたの好きに呼んだらいい」（中国人に限らず）、なんていう人もいますから、名前の統一はさらに難しくなります。

そこで、中国人の人名は「胡錦濤（Hu Jintao）」と表記して、カタカナでは表さないよう取り決めておけば、名詞にふってある謎のルビや謎の人名に悩まなくてもいいのではないのでしょうか。って、完全にスレ違いでしたね、はい。』

kaikaji 『> 中国人の人名は「胡錦濤（Hu Jintao）」と表記して、カタカナでは表さないよう取り決めておけば、

学術書などではある程度それが可能かもしれませんね。ただエンターテインメントの世界も含めると「アンディ・ラウ」のようにイングリッシュ・ネーム＋広東語の姓とか「アン・リー」のように北京語の名＋姓とか、「ウーアルカイシ（ウルケシ）」みたいに少数民族の名前をそのままピンイン読みしたものとかすでに色々なパターンがごちゃごちゃに混ざっているのでもさら統一は不可能かと・・・「王力宏」を「おうりきひろし」と紹介しているのを聞いたこともありますしね。』』

[<前の日](#)